

メッセージ題「神さまからの勇気」 牧師：秋山 義也

聖書：テサロニケの信徒への手紙一第2章1～13節

・苦しみを大胆に語る。また語るだけに留まらずに、その苦しみの意味を神の目からみて、どんな意味があるのだろうか、と問いの中を生きる。それが、キリスト教信仰の醍醐味であることを、パウロはテサロニケの手紙を通して、今、ここに生きる私たちにも福音のおとずれを語っています。

・本日の聖書の箇所、テサロニケの訪問のこと、そこで福音を語ることを、パウロは無駄でなかったと語っています。その前に訪れていたフィリピでの苦しみ、辱めに触れます。使徒言行録16章に記されてありますが、パウロ一行は主イエスを救い主とすることによって、迫害され、投獄されたのです。死を意識するような目にあつたのです。ズタボロになったのです。そして、その地から次に訪れたテサロニケにおいても、彼らは迫害を受けました。行く先々で、イエスを信じる仲間、兄弟姉妹が与えられると共に、迫害も苛烈さを増して彼らを歓迎していました。

彼らはそのような宣教の歩み、主による出会い、信仰の交わり、迫害にたとえあっても尚、それは無駄でなかった。意味がないことだったなどとは言わない。つまり大きな意味があつたのだ、と語るのです。何かに情熱を傾けて一度チャレンジし、しかし大きな失敗をした時、私たちの心には、ブレーキがかかることがよくあります。やってもどうせ変わらない。なら、もう傷つきたくない。やめてしまおう。諦めていいじゃないか。全て無駄だった。こうした心理が働きます。反対の声を受けて、立ちあがれないこともあります。なぜ、こんな目に自分はあるのだろうか。と嘆くのです。

パウロたちが、世界中に出会いに行き、福音を語る。迫害に遭うこと一度や二度ではありませんでした。何度も何度も、打ちめられるような出来事にあうのです。連行されたり、投獄されたり、殺害されそうになったり、何度もあうのです。もう、語るのをやめたらよいのに。そこまでして、死んでしまったら意味がない。そう思う人もいたかもしれません。それでもやめないその姿に、狂信的、熱狂主義をみて、怖さを覚えた人もいたかもしれません。しかし、パウロは淡々と、冷静に手紙を通して、テサロニケの人々に語るのです。「わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語ったのでした。」(2節)神が、働きかけて、勇気づけてくれる。苦しみのあること、また傷ついた思い、もうだめですよという言葉の主をさらけ出しながらも、その度に、いつも彼らと共にいてくださる主なる神が、彼らを勇気づけ、もう一度、その苦しみに向き合う時間を、心を備えてくださるというのです。そこから立ち上がり、私たちに「生きる勇気」を与えてくださるのです。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている」(ヨハネ16:33)と言われた主イエスの言葉を思います。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(Iコリント10:13)を新しく聴きます。聖書は、私たちに世に苦難があることをはっきりと語ります。しかし、それで終わるのではなく、その世に勝っていると宣言され、私たちに「勇気を出しなさい」と言って下さる救い主がいるのです。耐えられない試練が来たとしても逃れの道も備えてくださり、「生きよ」と語りかけてくださる、その苦しみを共に負ってくださるイエス・キリストがおられるのです。この救いの恵みに与る時、私たちは、

何度でも、何度でも、そこからやり直せる恵み、幸いがあることを知るのです。人との関係で、壊れてしまった絆があったとしても、「ごめん」という言葉からもう一度始めることができるのです。やってもダメだったと打ちひしがれる思いの中、孤独を感じ、生きづらさを抱えたとしても、そこから尚、私と一緒に生きてみないか、と主が語りかけてくださるのです。

パウロは、テサロニケの教会の人々に苦しみの理由を自由に語り、かつ弁明する必要を感じていました。どういう思いでテサロニケに行き、語り、共に教会を作ったのか、それはまたどういう教会として、キリスト者として歩んで欲しいのか、という祈り願いでもあったのですが、3節の言葉からその思いが記されています。

「わたしたちの宣教は迷いや不純な動機に基づくものではなかった。」このように、パウロたちのことを捉えて、惑わす者たちがいたのでしょう。それに真っ向から対峙して、彼は語ります。9節では、誰にも負担をかけなかった。働きながら語り、教会からお金をかすめ取るようなことは一切していない、と弁明します。自分の利益を求めている、これが福音宣教者の姿なのだ、と語ったのです。人の弱さがここで明るみにされています。一つは、きっと福音宣教に携わる者、そう語る者の中に、自分の利益を求めて、甘い汁を吸ってしまうことに慣れてしまった者たちがいたであろう、ということです。これは語る側の課題です。またそのような利己的な人々と、決してそうではない純粋に福音を宣べ伝えたいのだと、自分の身をさらし、苦しみに身を置き、語る者がおり、その区別がつかなくなっていた。聴く側の課題があったのです。不信と混乱が教会を覆っていたであろうと想像します。

パウロは、自戒の念を込めながら、神に喜ばれること、人間の誉れを求めないことを語りました。使徒としての権威からではなく、ただ、主イエスによって罪赦され、招かれ、語る者とされたこと。その喜び一本で、ここまでやってきたことを語ったのでした。テサロニケの人々と分かち合いながら、共に生きたじゃないかと、弁明するのです。

私たちは人につまずくことが、しばしばあります。信じていたのに、違いました。自分が信じていたイメージとのギャップから、そのように判断してしまうことがあります。失望したり、破滅的になることもあります。しかし、そのような時に、私たちが大事にしたいのは、最初の思いに立ち返る、ということです。その人とのはじまり、さいしょの思い。働きにおける始まりの思いなどです。はじめから、もう一度やり直そう、はじめてみよう、ということです。

イエス・キリストに出会った時の思い。イエス・キリストを告白した時の思い。イエス・キリストに招かれ、信じようと思った時の思い。これらをもう一度祈りの中で、言葉にしていくのです。その中で、自分の真実の思いと共に、神の思いとは何かに目が、心が開かれていくのです。最初は純粋だったけれど、理想と現実とのギャップから、あきらめの思いに至ることもあるでしょう。しかし最初の思いに立ち返るとき、主があきらめない方であるという希望が私たちの人生に差し込んでくるのです。自分が間違っていたということもあるでしょう。悔い改め、再スタートの時を備えてくださるのです。最初の思いに立ち返ることは、私たちに謙虚にさせます。使徒パウロは、使徒の権威をきて語る事ができたのです。しかし、彼は主に召された1人の僕（ローマ1：1）であることをいつも大事にしていました。兄弟たち、と、親子のような、家族のような思いで、同じ目線で語りかけたのです。彼に権威がなくても神の言葉、神の力に権威がある。だから力をもつ必要はなかったのです。

これがパウロの言う、神の喜びを求める生き方です。神の喜びが、私の喜び、私のまわりに及ぶ喜びになっている生き方です。この信仰のあり方は、私たちの生活、全領域に及びます。たとえば、家族。夫婦生活において、何か間違っていると思う時、上手くいかないと思う時、最初の思いに立ち返るのです。この人を愛すると誓った、あの出会い。またその出会いが神からきているものであることを受け止め、神の喜びにつながっている夫婦生活をよく吟味してみるのです。兄弟や、親子関係でも同様です。友人とはとても呼べないような敵対の関係にある人とも同様です。主イエスは、「あなたの敵を愛しなさい」(マタイ5:44)と語りました。私たちが愛する人も、愛せない人も含めて主イエスは救いをもたらしてくださいました。私に代わって、十字架につけられ、苦しみ、罪を担うという、出来事を通して、2000年経った今も、その恵みは続いています。

・パウロは、自分のことを弁明することに加えて、教会への限りない、偽りのない愛を語ります。親が子を愛するように。(7節) また、自分のいのちをさえ、喜んで与えたいと願うほどの愛を語ったのです。(8節)

先週、証しをしてくださったO兄が、子育ての大変さ、その日常と共に、神さまが親である視点の中で、自分を子どもとしてどう見ているだろうか、という思いを分かち合ってくださいました。これが、神の愛の中でいきる大事な視点であると、証しを聴いて思いました。私も、現在子育て真っ最中ですが、子どもしかることがあり、また自分のイライラをぶつけてしまっているだけのことも振り返るとあります。ちょっとやり過ぎたな、と思うとき、ごめん、としっかり目を見ていう事を大切にしています。なぜそういうことをしたのかを、頑張っって伝わるように、心がけています。どこまでできているかは分かりませんが、大人になってもいただける幸いがある。愛するということに対して、私たちはいつも、最初の思いに立ち返りたい。私たちが神を愛するよりも前に、神が、私たちをまず愛してくださいました。(Iヨハネ4:19)のです。いのちを捧げる程の愛。神のこの愛に生きる時、私たちは子供に対しても、隣人に対しても、自分のいのちを使い果たそうと思う、最初の思いに立ち返るのです。

・12、13節。語った言葉が、神の言葉として聴かれる。その恵みが伝わってきます。私たちの思いを越えて、私たちの心を結び合わせる神の言葉の働きがある。心を一つにして、その働きに期待し、新しい一週も過ごしていきましょう。

